

稿半にして毛詩鄭風を繕きしに、大叔于田の詩に於て、毛公暴虎に注えて空手虎を搏つを謂ふと曰へり、未だ其本く所を知らずと雖、余もまた毛公を打破するに足るの確説あるにあらざれば、姑く毛説に従ふを順當とせん、依て、省借第一例の暴字の解釋に係る部分を抹殺す、稿成りて改むるに頼し、乃ち此に附記すと云爾

廉孫 識

## 雜 錄

## 森 の 中

自 然 兒

今の我身を惨<sup>あは</sup>れの極みと、さげすむ人の心を知りがたや、われ痛まざらむとするも、大方の世の人の心なきふり言にはいかで堪へ得べき。さはいへ我を惨れの者と嘲ける人の様はた如何に、時の流れに漂ひて擾々の巷に出入し、濁穢<sup>ぢやくたい</sup>の中に奔走せ、臭と陋との厭ふべく惡むべきを知らざるなり。嘗て静寂を望まざるもの、奚んぞ静中の妙味を知らむ、若まや、斯の如きが世の所謂快樂なりせば、我は惨れのものと呼ばるゝをば敢ていなまま。さばれ我には毫も彼等を呪咀はむ心なく、唯慙憐の情やるせなく、自家の哀涙を掬えて彼の同胞のために濺かんのみ。我は願ふ、我現今の状態は如何なるや、普ねく世の人々に知られむことを。若しや露程にても、己のが享有する人生の真相にきて、彼の人々に會得<sup>ひだく</sup>せられたらんには、苟にも常識を備ふらん人々は、皆我と等しき境遇に立ち、我と等まき運命に遭逢せむと願ふならむ。此に於てか平和は晨の露の如く地の極に及び、自由と平等と友愛と世をこめて、人は最早互に其同胞を猜み、兄弟を災ひせんとのあたなる思ひに惱まざるべく、

はた誰とても悪業の門、不淨の巷に利害の念を萌さざるべければ、世に奸佞邪惡のともがらも、亦痕なきに至るべし。そも寂寞の中、孤獨の境涯の我神會の友や誰れ。我と宇宙と、實に此の如きに過ぎざりき。此社會（社會と云ひ得べくば）や吾感界の至上の美、智界にては唯想像に畫くのみ。かくて四圍の風物に怡樂の友を得つ、互に濺く相愛の其快樂や、わが望みの極みなりき。我は惑ひ、彼の情波慾浪に心身を漂蕩はせ、紛々として罪障に存ふ人々が、かゝる快味を知らざることを。噫、我幻想の幸福は、かの人々の肉感の幸福に勝ること、それ幾何ぞ。

我惱みて夜の長さに堪へざるるとき、我難みてまばしの眠を得せざるるとき、我は唯朦朧たる過去の生涯における、種々様々の閱歷と道程とを、幻の如く影の如き記憶の裡に追想まつ、現在の境涯より、我心を轉じたりしこと幾そ度。笑ひ、樂しみ、憂き惱み、交々入りかふ時運の變遷、人事の推移等、皆我を助けつ導きつ、ひとときの間、我をして煩悶の人たるを免れしめま伴侶なりき。さはれ我幻想の友としていとも屢、いともすゝみて、追懷願望する其時期は何れの時なる。幼なきむかふの樂みか、あらず、我には娛樂とてはいと稀に、唯心痛のみぞ多かりける。我の索居、我の獨歩、乃至夜の色、星の影、野の花、森の鳥等、凡て自然と、自然の母と、我とのみ送りける、かのあけては又もくれ行きし絶好の日ぞ、我思ひ出なりき。朝霞たなびく東の山の端に、ほの／＼と昇る曙光を、瞻め、清き深き默思と幽想とに耽らむため、夙に夜の床を離れつ、時しも明けはなれたる清空は、美まき今日の門出をはまめつ、天つ光は玲瓏とまて世に滿ちぬ。此折の我願、あだなる文、あやしの友の訪ひ來て、此神韻縹緲たる良辰を汚すなからむことの外また一物なき。斯くて限りなき歡喜に滿ちし心を、自露の草ふみわけて歌ひつ、朝げにと歸り來ること常なりき。或は一と日の正課

を終へて身稍閑なる折には、熱く照る日の厭ひなく、唯我逃れぬ前に、不時の訪問の我を煩はさ  
らんことをのみ氣にはまつ、足を空に獨飄然として日の光あびつゝ出で立つぞ、また折々の我習ひ  
なりま。まかはあれ、我幸に一度とあるさびしき村の細道に、歩を運び、我跡の既に消えける様思  
はれま其時は、又如何ばかり踴れる胸、喜びの情もて、あたゑ世の繫縛を免れ、將に我眼前に開け  
んとする、美妙なる自然の懷に入るを自祝福ま、獨り虚空に高く叫びしぞ、さても我今より自由の  
人たりと。

斯くて羈絆なく、威力なく、人工的表象なく、唯自然のまゝ、太古のまゝなる森の中、人なき所、  
家なき所、嗚呼其處たる、我逍遙の最初の人とまて、まかも不健全なるわたま人の、自然と我との間  
に闖入し能はざる所を求めて、靜かに歩を移まつ、終に千古の色を改めざる、深き秘密のこもれる、  
うるはしき壯麗を展べ、其胸に抱擁寛語する、森の中に入る。白水樹の間を流れて潺々、湛ふる  
漣漪藍にさも似たり、水濱に咲ける草花は、紅白黄紫色様々に、其美なる言はむ方なく、綠樹の繁  
り、林籟の清爽、我心微妙の感にうたれぬ。凡て蔭冷しく我を蔽ふ老木の犯し難き、我を周りに茂  
れる若葉の鮮なる、我足下に生ひしげる草や花の瀟洒なる、はた葉越まに見ゆる雲のいさよひ、軟  
風のそよぎ、水の響き、鳥の聲は、觀察と稱讚と嘆美の不斷のゆきかひをもて、我心を充たまたり。  
奇まき幾多の物象は我に温情與へむとて、是より彼に、彼より是にと誘ひ行き、我は夢の如く幻の  
如き心地まつ、獨草葉の露を枕にて、ソロモンの榮華の極みさへ、尙此花の一に若かざりさと、覺  
えず自快呼またりと。

斯くもうるはしき森の中は、我想像の行くところ、早や空まき荒野にあらじ。我空想の向ふまゝ、

理想の一小邦土は成りぬ。されば諸の邪見と情慾と屈辱と、皆影もなく隠れ行き、此自然の聖壇には生けん純潔無垢の人のみぞ訪ひ来て、たのまき社會をはなれ、忽ち神光の油然とて我を射るあり、我其一員とてつゆ慚づかまからぬものとなりける。斯くて昔まありきと傳ふるエデン園や、黄金の時代を思ひ浮べ、いともゆかまき追懐とて、今に追慕措く能はざる過ぎし我人生の舞臺も、これら榮華の日を滿たえつ、人生無極の眞樂に對え、隨喜の涙を溢えぬ。其快樂や谷間に咲ける花のごと、如何に美しく、如何に淨く、まかも如何に我人界をさることのそれ遠き、若まも此瞬間に於て、猜妬詐等の鄙まき觀念にして、此樂土を襲ひ、我心意を曇らま、幻想を亂またらんに、我は我精神の安宅たる、彼の美まき情趣に委棄せむため、如何ばかり悲哀と輕蔑とをもて、そば追ひのけたりけん。まかはわれ、斯る折にまも尙我觀想には缺如するものありて、心痛の情やるせなきと折々なるを。たどひ我幻想にして實在と代り。現實と變ずることあるも、なほ此空虚は充たされざるべく、此渴望は醫せられざるべく、唯我は永遠に空想と想像と憧憬とをつゞけざるべからざるなり、斯く何物をも充ま何物をも醫す能はざる空虚渴望たる、天は全く如上の幸福と類を異にま、その何なるかは、不幸にまて、我に一定の思想なきも、其は渴望たる缺乏たるものには相違なき。されば我は尙幸福なるぞかま。そはまが何なりやどの生ける思念、乃至我失ふを願はざる、こゝちよき悲哀をもて充たされればなり。

我体塊然とて是土に留まれど、思は高く我世の萬の物を貫ける、我思慮にあまる或物（自然の裏に存する）に遠ま、我廣大無邊の其中に埋没せんため、今は早や何事も考察推究するとなく、不斷宇宙の靈氣を仰ぎたり。彼の無極の方處に我を遺却せんと、想像を畫きて自樂みたり。されど我

人生の有限を思へば、我心休むに所なく、息も絶え入りたらんやう。嗚呼我時間的繫縛を放れ、一躍して彼の永久無限の中に突進せまほしくなると、向上的愉悅に喘く折りまもあれ。自然の秘密は豁然とえて我心眼に開かれつ。我忽然とえて恍惚の境地に至り、社會を離れ、人類を離れ、我を離れ、天然を離れ、唯宇宙に繋るのみ、宇宙と冥合するのみ。悠然天國に入るのみ、其歎喜、其愉快、人界に於て譬へ様なく、唯真心まことこころこめて天を仰ぎ、深き感謝に入るの外なかりき。

打續ける淨樂の中に、我世の開けそめにしこのかた。類ひなく美まき今日の日も暮れそめたり。日は早や西に沈みて餘光僅かに夕べの雲に残り、夜を守る星の唯一つ、今日の遊びも是迄と我に歸りを促すやう、されど今日の猶忍ばれて、時の流れの速なるを、今更の如く感じ、壘を得て蜀を望む人の心の、望みの極みなき。今となりては此日も未だ満足の足らはぬ心地えて、いやが上にも尙愉快を嘗めたりせばと、自ら飽くなき想念を辿り、失せ行きま時に、再び遭はむとのせめての慰みは、明日にも亦訪ひ來るために、消ゆる我影唯まばしと、口ずさむ許りなりけり。

森を出で、猶幾度か徘徊願望まつ。家に歸れば體稍疲れまも、喜び胸に溢れ、盡きぬ森の面影をつきぬ涙に浮べ、獨我境界の静けさと幸とを感じ、他又考ふともなく、想ふこともなく、作すこともなく、時まも用意の夜のものに半日の饑をいやまつ、夜もすがら熙々浮揚の裡に過まゝは、これ全く前に我孤獨に耽り幽寂に入りまが故とは後にぞ知られける。若まや我に伴ありたらん折には、我わやまも惱みまとは、我主人の物語る處。斯く物語られて。折ふし自過ぎ來し方を省みつ、其言の誠に然るを覺り得たり。終に更闌けておぐらき園に出で、徜徉微吟しはまして。眠其物にままて心地よき、身と心もて安けく床にぞ就きにしが、更けゆく夜半のわがために、置く樂まき夢にの

せられ、數々遊ぶ森の中、夜の明けぬるも知らざりき。これぞ我生涯に於て、眞の幸福を齎らし、日になん、其幸たる慘なく悔なく唯純潔高尚もの、願くば今日のごと。明日も來ん年も、否我我送る生涯を、斯くて過さしめよ。其願も單に幽寂の境の默思靜想に止まるのみ。されど苦きみ惱む輩は、人の心を煩はし、其自由を害ふとかや、嗚呼我には頻求の此輩ありて、羈絆と繫累を離れ、孤獨たるとはいど稀に、あはれ我は此快樂を享有せむため、孤獨に入らむため、此煩累より脱するの要あり、今日の經歷は、又も斯る快樂に耽らんための先驅ぞかし。(ルイソンの旨趣)

## 嚙氷放言

布衣生筆記

樂しきは池塘春草の夢さやら申すも、段々に夢が教場内にも結ばれ、御目玉を食ふ次第になつて、折角晝寝の好時期を欠伸に過す様な不經濟な事となる。經濟界不振の今日此頃、勤儉貯蓄の大々的必要である云ふ事は、大藏のをさごの癡言を聞かないでも、分り切つて居る次第であるから僕も近頃は晝寝を節儉して、訪問に時間を費しつゝあるが、此處に掲ぐるのは、城南の其先生が氷を嚙んで快辯を振られたのを筆記したのである。元より心覺えの誤りなどは多からうと思ふが、それは速記でないから恕して貰いたいものだ。僕は文字に拙いのに、殊に下付な談話語のまゝ、記したので、メチャクである。それも御許を乞いたい。而も文字上に對する責には、飽迄僕が任するのである。

何か話せど、生憎君等の眠氣さましになる様な事がサツパリないんだよ。若い時の失策談やら、失戀談などある事はあるが、それは大臣になつてからの逸事談とまで、新聞屋よろこばせにとつて置こう。一体日本は妙な習慣の國で、昔も盜賊したので、破倫な事したので、高位高官になつて、人爵というものにあり付くと、逸事談とまで社會の歡迎を受くる事となる。で今やたらに面白い話をやらかすと、直に君等が攻撃の材料とするので、暫時玉手函の中に仕舞つて置くが、今に親任